

# 市史通信

## 【目次】

- 礼送艦「アストリア」来航
- 日本愛妻会と  
横浜ペンクラブ①
- 資料紹介 広報課写真資料
- 所蔵資料紹介
- 市史資料室たより



停泊中の「アストリア」と仮桟橋に上陸するアメリカ海軍儀仗兵(1939(昭和14)年4月17日)  
斎藤博への弔意を表すため、アメリカ国旗は半旗となっている。(米国国立公文書館所蔵)

## 第4号

【発行日】2009年3月31日  
【編集・発行】横浜市史資料室  
〒220-0032  
横浜市西区老松町1番地  
横浜市中央図書館・地下1階  
【電話】045-251-3260  
【FAX】045-251-7321  
【E-mail】  
gy-sisi@city.yokohama.jp  
【ホームページ】  
<http://www.city.yokohama.jp/me/gousei/housei/sisi/>

## 礼送艦「アストリア」来航

一九三九(昭和14)年四月一七日、一隻の外国軍艦が横浜港に入港する。その軍艦の名は「アストリア」(排水量九九五〇t)、一九三四(昭和9)年に竣工したアメリカ海軍最新鋭の重巡洋艦である。同艦はワシントンで客死した斎藤博前駐米大使の遺骨を日本に届けるため、アナポリスから約一ヶ月の航海を経て横浜港へやつってきた。

ところで、当時の国際情勢に眼を転じてみると、ヨーロッパでは、ナチス・ドイツが台頭し、同盟国のイタリアとともに、その勢力を拡大し続けていた。一方、東アジアでは、一九三七(昭和一二)年七月七日の蘆溝橋事件に始まる日中の衝突が泥沼化し、中国各地で激しい戦闘が繰り広げられていた。そうしたなか日本は、中国を支援するアメリカ・イギリスと対立を深め、次第にドイツ・イタリアに近づいていった。つまり、「アストリア」は日米関係が悪化するなか来航したのである。

では、日本の人々は「アストリア」の来航をどのように迎えたのか、今回は横浜市史資料室所蔵の写真資料を交えながら横浜市における礼送艦「アストリア」来航の様子を紹介したい。

### 一、礼送艦の派遣決定

一九三九年二月二六日午前一時三〇分、肺病を患っていた斎藤博は五三

歳でこの世を去る。最期を迎えたのは、かつてワシントン会議の随員として止宿していたホテル・ショーラムであつた。斎藤は優秀な外交官であり、ニューヨーク総領事や在蘭公使を歴任した後、一九三三(昭和8)年一二月に在米大使に就任し、中国問題を巡つて悪化しつつあつた日米関係の修復に尽力していく。特に日本軍機がアメリカ海軍の砲艦を誤爆した一九三七(昭和一二)年二二月のパネー号事件では、外務省の指示を待たずに即刻アメリカ政府に謝罪し、反日感情の沈静化に努めた。こうした機転の利いた斎藤の行動は、次第に受け入れられていったが、アメリカの反日的な空気は変わらず、斎藤は両国の関係改善に奔走し続けた。しかし、そのことが斎藤自身の体を蝕み、肺病を進行させた。一九三八年秋、斎藤は近衛文麿首相から外相就任の要請を受けるが、すでに斎藤の身体は療養に専念しなければならない状態になり、そのまま任せられながら斎藤個人となつた。

斎藤の逝去に対し、フランクリン・ルーズベルト大統領は軍艦による遺骨の移送を決定し、最大限の弔意を表す。現役大使の遺骨を軍艦で移送するという慣例は存在したが、すでに斎藤は一九三八年一二月に大使職を堀内謙介前外務次官と交代していた。アメリカ政府の異例な対応の背景には、日米関係の修復を試みる政治的な意図ともに、斎藤個人に対する厚意も窺える。



「アストリア」の横浜入港を見守る日本水兵（米国国立公文書館所蔵）

周三市長は、「現官デナイ人ノ遺骨ヲ軍艦ヲ以テ護送シテ來ルト云フコトハ日本ニ対スル非常ナル敬意ヲ表シタモノト吾々ハ考ヘルノデアリマシテ、殊ニ「アメリカ」ト關係ノ深イ横浜市ハ此ノ軍艦ノ將士ニ対シテ遠途ノ旅情ヲ慰メル為ニ、十分ナル歓迎ヲシタイト考ヘテ居リマス」（『横浜市會議事速記録』、市史資料室所蔵）と、接待費の趣旨を説明し、各議員に同意を求めた。

横浜市は「アストリア」の乗員を野毛山公園に招いて園遊会を催すことを決定し、さらに四月一四日には、日米の国旗をリボンで結び中央に富士山を配したデザインの市電無料乗車券（劇場半額入場券付）を作成して乗員たちの慰労を図った。

入港前日の四月一六日には、遺骨受領式にむけた準備が進められ、午後二一八日、斎藤の遺骨はアナポリス海軍兵学校での葬送式典を終えた後、校舎の沖合に停泊する「アストリア」へ移され、パナマ運河、ハワイ・ホノルルを経て一路横浜へむかっていった。

## 二、横浜市の対応

『横浜貿易新報』は、三月三日に軍艦による遺骨移送を報じて以降、「アストリア」の航海日程を度々報じ、横浜の人々にその接近を伝えた。遺骨の受け渡し会場となる横浜市では、着々と歓迎準備が進められ、三月三一日の市会では、接待費四千円が市の追加予算として計上される。青木

「アストリア」乗員用に用意された市電無料乗車券  
『横浜市報』第619号より（横浜市史資料室所蔵）

時三〇分、ホストシップを務める軽巡洋艦「木曾」（排水量五五〇〇トン）が入港して六番浮標に係留された他、大桟橋周辺では、開港以来初となる海上葬列の予行演習が行われ、多くの人が見物に集まつた。「アストリア」の入港を目前に控え、横浜港内の緊張は次第に高まつていつたのである。

## 三、「アストリア」入港

横浜港には、日本と防共協定を結ぶイタリアの軽巡洋艦「バルト・ロメオ・コレオーニ」（排水量五〇六八トン）が四月四日から停泊し、様々な交流行事を催していたが、「アストリア」はそれと入れ替わる形で入港する。

四月一七日早朝、館山沖に到達した「アストリア」は日本海軍の駆逐艦「響」、「狭霧」、「暁」に出迎えられ、その先導を受けつつ東京湾を進み、午前八時一五分に横浜港の防波堤外に姿を見せた。そこで「木曾」と相互に二一発の礼砲を交換した後、八時四五分に入港して一〇番浮標に係留された。

その後、外務省や海軍省の代表が

「アストリア」を訪問して歓迎の挨拶を行つたのを皮切りに、日米双方の間で各種儀礼が交わされる。ターナー艦長は礼装服姿で代表団や「木曾」艦長・八木秀綱大佐を出迎えた後、九時五〇分に答礼として「木曾」を訪問、一度



軽巡洋艦「木曾」を訪問するターナー艦長（米国国立公文書館所蔵）

## 四、遺骨受領式

午後一時一五分、一九発の弔砲が轟くなか、斎藤の遺骨は「アストリア」の搭載艇に移され、海軍や税関の汽艇にむかう。大桟橋の式場では、斎藤の親族の他、ジョセフ・グリー駐日大使をはじめとする在留アメリカ人関係者、澤田廉三外務次官や山本五十六海軍次官などの外務省・海軍関係者、

川県知事や青木市長、花田政春横浜税務課長をはじめとする在留アメリカ人関係者、澤田廉三外務次官や山本五十六海軍次官などの外務省・海軍関係者、

軍次官などの外務省・海軍関係者、

村知事や青木市長などの自治体首長、日米海軍儀仗隊や地元有力者など数百名が遺骨の到着を待っていた。

搭載艇は一時二〇分に仮桟橋に接岸し、遺骨の入った白色の御堂を捧持した四名の水兵がターナー艦長とともに上陸する。ターナー艦長は澤田次官の前に進み、敬礼して遺骨の受け渡しを

伝えると、澤田次官は丁寧に礼を述べ、ターナー艦長と握手を交わした。

遺骨は水兵から斎藤の後輩である四人の外務省事務官の手に引き継がれ、式場中央の祭壇に安置される。その後、鶴見総持寺の僧侶による読経の後、臨港停車場から特別列車で東京へむかうため、軍楽隊を先頭に横浜市内中心



臨港停車場にむけて横浜市内を行進する葬列（1939(昭和14)年4月17日）  
アメリカ大統領、外務大臣、駐日米国大使の花輪の後ろに白色の御堂が続く。（米国国立公文書館所蔵）

葬送曲が流れるなか、遺骨受領式は厳かに行われ、遺骨を移送するという「アストリア」の任務は一先ず終了する。午後四時、「アストリア」は一〇番浮標から大桟橋D号に移動して錨を下すが、喪に服するため、乗員たちの上陸を一切禁止した。八木艦長からは晩餐会開催の申し出があつたが、それも同様の理由から丁重に断っている。

「アストリア」が静かな夜を迎える一方、大桟橋には、日米親善の象徴を一目みようと大勢の人々が集まつた。その中から「米國海軍万歳」が叫ばれると、乗員たちは手を振つて応えた。横浜の人々は「アストリア」の入港を大々的に歓迎し、伊勢佐木町などに日米の国旗を掲げ、両国の友好を祝つた。

翌一八日、東京の築地本願寺において斎藤の葬儀が行われるため、ターナー艦長は儀仗兵を率いて上京したが、残つた乗員たちは午後から上陸が許された。斎藤の葬儀終了によつて「ア

部を行進した。沿道では、各種団体の代表や一般市民など約三万五千人が整列し、葬列の通過を静かに見守つた。

二時三五分、遺骨は臨港停車場に到着し、特別列車中央の靈柩車に格納される。その後、二時五〇分に多くの人々に見送られながら列車は発車し、三時三三分に東京駅に到着、遺骨は沿道に集まつた市民の哀悼を受けながら千駄ヶ谷の自宅へ帰宅していった。

## 五、横浜停泊中の「アストリア」

葬送曲が流れるなか、遺骨受領式は厳かに行われ、遺骨を移送するという「アストリア」の任務は一先ず終了する。午後四時、「アストリア」は一〇番浮標から大桟橋D号に移動して錨を下すが、喪に服するため、乗員たちの上陸を一切禁止した。八木艦長からは晩餐会開催の申し出があつたが、それも同様の理由から丁重に断つている。

「アストリア」が静かな夜を迎える一方、大桟橋には、日米親善の象徴を一目みようと大勢の人々が集まつた。その中から「米國海軍万歳」が叫ばれると、乗員たちは手を振つて応えた。横浜の人々は「アストリア」の入港を大々的に歓迎し、伊勢佐木町などに日米の国旗を掲げ、両国の友好を祝つた。

翌一八日、東京の築地本願寺において斎藤の葬儀が行われるため、ターナー艦長は儀仗兵を率いて上京したが、残つた乗員たちは午後から上陸が許された。斎藤の葬儀終了によつて「ア

ストリア」の喪は解かれ、乗員たちは一ヶ月ぶりに羽を伸ばすことができた。乗員たちは伊勢佐木町での買い物や山下公園での花見を楽しみ、各々航海の疲れを癒していった。

一八日の夜からは様々な歓迎行事が催され、東京市内の観光や日光・箱根湘南方面への旅行、各種歓迎会が次々と展開されていった。横浜市の企画していった園遊会は二一日午後二時に実施され、小雨が降るなか、野毛山公園に「アストリア」の乗員約六〇〇名と日本海軍関係者約一〇〇名、その他市内有力者を合わせて約九〇〇名が集まつた。当初、雨天の場合は別の会場を用意していたが、会場の変更は不要で、予定通り野毛山公園で開催された。



臨港停車場に整列する日本海軍儀仗兵（米国国立公文書館所蔵）



特別列車を見送るアメリカ海軍儀仗兵（米国国立公文書館所蔵）

水兵の数はさらに増え、市内の繁華街は一層賑わった。他の軍艦の来航時と同様に、「アストリア」の来航も横浜の繁華街を潤していくようである（詳細は『市史通信』第三号を参照）。

## 六、「アストリア」出港

「アストリア」の乗員は横浜を拠点に日本の春を楽しみ、横浜の人々もアメリカの厚意に応えるため、乗員たちを歓待した。横浜市は日本への来港記念としてハンカチーフを「アストリア」の全乗員に贈っている（『横浜市報』第六一九号）。友好ムードのなか、二五日に「アストリア」の艦上において惜別の交歓会が催されたのを最後に、日米の交流行事は終了し、翌二六日午前一〇時、「アストリア」は多くの人に見送られながら次の停泊地である上海にむけて出航していく。

娘たちは着物を雨に濡らしながら乗員たちに日本酒やビールを振る舞い、乗員たちは模擬店に出された寿司や天ぷら、おでんを頬張りながら宴を楽しんだ。一方、舞台上では、日本舞踊やマジックショーも行われ、酒に酔つた水兵が壇上に登つてダンスを踊るなど朗らかな雰囲気を醸し出していった。

園遊会は四時に終了したが、市内の繁華街はアメリカ水兵の姿で連日賑わった。特に二一日夕方に横浜と馳染み深いガム島警備艦「ゴールド・スター」（排水量五〇六六）が「アストリア」と連絡をとるために入港すると、



『写真週報』第62号（横浜市史資料室所蔵）

来航による日米の友好を大々的に報じた。日本は「アストリア」の行動を目的に来航した「アストリア」であつたが、帰路の過程では、軍事情報の収集という敵対行動をとつており、横浜への来航目的は単なる遺骨の移送だけではなかつたようである。そのような点から横浜における日米の友好ムードは本格的な対決を前にした一瞬の出来事であった。

三ヶ月後の七月二六

る。例えば、内閣情報部の編集する『写真週報』（第六二号）は、表紙に大桟橋を出発する海軍儀仗隊の写真を掲載して特集記事を組んだ。そのなかでタウンゼント・ハリス駐日総領事から始まる日米友好の歴史を紹介し、現在の日米関係は悪化しているが、日本とアメリカが争う理由はどこにもなく、日本の東亜新秩序建設の意図をアメリカが理解したならば、誤解は解けて日米の友好は一層深まるであろうと説いている。

しかしながら、そうした日本の考えとは裏腹に、アメリカの強硬な姿勢に変化はなく、緊迫するヨーロッパ情勢などもあって日米の対立はさらに深まっていく。その兆候は横浜出港後の「アストリア」の行動にも見られ、同艦は新型戦艦建造中の横須賀ドックや日本の統治する南洋諸島の偵察を試みながら帰国する。つまり、日米の親善を目的に来航した「アストリア」であつたが、帰路の過程では、軍事情報の収集といふ敵対行動をとつており、横浜への来航目的は単なる遺骨の移送だけではなかつたようである。そのような点から横浜における日米の友好ムードは本格的な対決を前にした一瞬の出来事であった。

### 【主要参考文献・資料】『写真週報』第六二号

（二九三九年四月二六日）／『横浜市報』第六二号（二九三九年四月二七日）／『アサヒグラフ』昭和四年五月三日号／海野芳郎「アストリア号の斎藤大使遣骨護送」（『国際政治』第二号、一九六六年）／ロジャード・デイビングマン「友好への別れ」（一九三九年四月の米艦アストリアの日本訪問）（入江昭・有斐閣、二〇〇八年）／その他、『横浜貿易新報』など市史資料室所蔵の新聞資料群を参照

（吉田律人）

真珠湾攻撃によって日米の戦争が始まる。太平洋上で激しい戦闘が繰り広げられるなか、「アストリア」は一九四二（昭和一七）年八月の第一次ソロモン海戦において、日本海軍の攻撃によって沈没していく。他方、ターナー艦長は提督に昇進し、ガダルカナル上陸作戦や黄島上陸作戦などを指揮して日本本土への攻撃、すなわち、横浜や東京に対する空爆の礎を築いていった。

日、アメリカは日米通商航海条約の破棄を日本側に通告し、対日経済制裁への道を開いた。経済制裁で窮地に陥った日本はドイツ・イタリアとの関係を強化するため、一九四〇（昭和一五）年九月に日独伊三国同盟を締結し、資源を求めて東南アジアへ侵攻する。その結果、アメリカとの対立は厳しさを増し、一九四一（昭和一六）年一二月八日の真珠湾攻撃によって日米の戦争が始まる。

（吉田律人）